

小説同人誌評 30

コロナ禍と内省

細見和之

相変わらずコロナ禍の収束が見えない状況のなかで、この小説同人誌評も三十回目の節目を迎える。私は大阪文学学校の生徒だった三十数年前、川崎彰彦、北川荘平、小島輝正といったひとたちの同人誌評に接した。彼らの場合、ひとつひとつの批評がたんなる作品の紹介ではなく、それ自体、個性的な表現となっていた。作品のあらすじの紹介などほとんどなかったように思う。もっと本質的なところで作品の要所が掴まえられていた。顧みて自分の批評の貧しさに忸怩たる思いが募る。私の場合、ほとんど作品の筋の紹介に文面が費やされている。しかもあらすじの読みを間違えていないかと毎度、恐々としているのだ。私の同人誌評は作品の表面をなぞることに終始してしまっているようだ。才能の違いといってしまえば身も蓋もないが、小説の本格的な創作体験が私に欠如していることも一因なのかと思う。

それでも、これだけ同人誌評を続けていると、個々の作品紹介には尽きない、同人誌の世界のゆるやかな流れのようなものも感じるつまり、コロナ禍のなかで、来し方を振り返る作品が年長のひとたちによって書かれるようになった印象があるのだ。コロナ禍などなくとも書かれていたものかもしれないが、ステイ・ホームという掛け声呼び水になったものも少なくないと思われる。これはいま世界中で生じている現象のはずなので、大いに期待できることではないか。コロナ禍そのものを描いた作品だけでなく、それによる内省によってもたらされる作品群である。

その代表というべきは、『とぼす』第64号掲載の、末次弘「エリゼは不在(一)(二)」。時代は六十年安保闘争のさなかで、主人公の佐々木浩三は九州の大学(九州大学がモデルだろう)の文学部自治会委員長。安保闘争の「敗北」を受けて、大学内では種々の新左翼党派が争っている。親しくしていた女子学生はアメリカへの留学の道を選び、国文学科に所属していた佐々木は、自分の新たな生きかたをもとめて、哲学科の大学院へ進学するため、哲学科の白川教授(滝沢克己がモデルだろう)のもとを訪れる。そして、黒田響子(エリゼ)という女子学生と新たに出会う…。六十年安保闘争以後の時代を真摯に辿りなおす作品としてまことに貴重。この作品の末

尾には「続く」の文字が置かれていて、大きな作品へと結実することが期待できる。

同じく、六十年安保闘争へ向かう手前の破防法(破壊活動防止法)反対闘争の時代を描いた作品に、『樹宴』第20号掲載の、大丘忍「戦いの幻想」がある。当時の闘争の舞台裏をいささか皮肉に描いた作品で、こちらは「京都市にある国立K大学」(つまりは京都大学)が舞台。

K大学の寄宿舎は北寮、中寮、南寮に分かれていて、恒例の秋期文化祭で南寮は「赤犬」という劇を行うことになる。南寮は男子寮で、主役の女子学生は大学病院付属の看護学校の学生をあてることになる。芝居の上演では、南寮の「やっかいな男」で工学部の学生、谷山健介を、その女子学生をつうじて籠絡し、「我が陣営に引き込むこと」が画策されている。そういう卑劣な駆け引きのために白羽の矢を立てられたのが、看護学校で学生運動の中心のひとりとなっていた上宮俊子だった。

上宮は当初は運動の方針に忠実な形で谷山に接するのだが、学生運動を冷やかに見つめ、同時に社会に対して独自の批評的な視点をもたえている谷山に次第に惹かれてゆく。谷山は厳しい倍率の学内受験で医学科へ入りなおし、上宮は元来学びたかった心理学を修めるため、他大学へ入りなおす…。

六十年安保闘争を二十歳前後で体験した

世代が現在では八十歳前後。その世代のひとたちが人生の長い時間をへて当時のことを深く振り返っているという事態が、これらの作品には示唆されているのではないか。

そういう「闘争」とは無縁な作品だが、『MAZON』第50号掲載の、蔦恭嗣「青い春」も、京都の学生アパートを舞台にしている。

時代ははつきり特定できないが、K大学のある東一条まで路面電車が走っている設定なので、一九七八年より以前であることは確か。そのK大学に通っている「僕」の視点から、学生アパートの住人のたたずまいが端正な文章で淡々と綴られている。

軸になっっているのは、アパートの「僕」の真上の部屋にいる同じK大学の学生、山下のもとを訪れていたD大の女子学生と「僕」との淡い関係である。他の女性とも付き合っているらしい山下に対する不満を彼女から聞くうちに、「僕」は彼女に想いを寄せてゆくのだ。「僕」は大学のギタークラブに入っていて、アルバイトのお金でハンドメイドのギターを買って、学生アパートで爪弾いている。「闘争」と離れて、あるいはそのただなかでも存在していた、そんな陽だまりのような時間がここには流れている…。

こういう作品もコロナ禍のステイ・ホームが呼び起こしたものでないかというのには、私の想い過ごしだろうか。

さて、『あべの文学』第31号は、前号に続いて二三一頁の大冊となっている。ただし今号では、四百字詰め換算三一〇枚におよぶ夏藤周樹「北洋艦隊」が掲載されていて、それが一冊の半ばを占めている。今回読んだなかでいちばんの大作であるうえに、これがじつによく書かれているのだ。

大きな筋でいえば、日清戦争に際して自沈した、清国北洋艦隊の最大の軍艦（定遠）の艦尾飾りをめぐる、一種のミテリー仕立ての作品である。作中では、長崎に生まれた、ヨーロッパ人の血をひいている龍三郎という無頼漢が獅子奮迅の大活躍をする。

日清戦争の戦利品を取めた倉庫（振天府）にある艦尾飾りが偽物であるかもしれないという話に、大正天皇が強い関心を示し、その調査を命じるところから物語ははじまる。じつは大正天皇は、皇太子だった子どものときに、横浜港に寄港したその巨艦にこっそり侵入したことがある身だった。そのとき手助けしたのが、あの手この手で北洋艦隊の水兵となっていた龍三郎だった。その龍三郎が、自沈した巨艦の「本物の艦尾飾り」をいったいどのようにして入手するにいたったのか。清国と日本の二重スパイが登場し、敵味方がいち乱れ、まさしく手に汗を握るような虚々実々の展開のなか、艦尾飾りの本物／偽物という関係自体が宙吊りにされてゆく…。

この物語の事実と虚構の境目は私には判然としないのだが、文末には膨大な数の参考文献があげられていて、それなりの歴史的事実を踏まえた物語であることが推測できる。欲をいえば、最後のところで事態の真偽が二転三転する場面を、もうすこしゆつたりと描いて欲しかったという気持ちは残る。とはいえ、大量のデータを踏まえ、これだけの物語を紡ぎだす作者の力量には感嘆するほかない。

同志掲載の、高塚基「木槿（むくげ）のほとりの石」にも惹かれた。
一九一四年に神戸から宝塚まで隧道（上水道）を掘る苛酷な工事が行われ、その工事に携わっていた朝鮮人労働者が事故死していたことをめぐる短篇。

主人公の木村直也は、神戸市北部、宝塚に近い山中で測量の仕事の途中、木槿のそばに不思議な五つの丸い石が置かれているのを発見する。高速道路の敷設に先立つ現地調査のさなかのことだった。案内役をしていた地元歴史に詳しい小林から、その石が朝鮮人の歴史に詳しい小林から、その石が朝鮮人も従事していた隧道工事で亡くなった者たちの墓ではないか、と告げられる。

木村はその墓のことを、高校の同級生でいまは高校教員をしている徐慶子（ソキョンジヤ）に告げる。彼女は高校時代、池上慶子と名乗っていたが、卒業式の日になまちょゴリを来て本名で呼ばれたのである。彼女は高校

で人権教育を当然のごとく任せられ、困惑している。このテーマは彼女の教材開発にぴたりではないかと、木村は持ちかける。二人は小林の案内で当時の事故現場に位置していた古い旅館を訪れる。すると、そこにはその工事と深く関わっていた祖母の記憶を語ることのできる老婆がいた…。

私自身、自分の地元で、まさしくこの作品が描いているような朝鮮人の足跡の掘り起こしを試みていて、教えられることが多かった。ここに登場する小林のような人物が見当たらず、自分がむしろ小林にならねばならないほどかじさを常に抱えつつではあるが。

老婆の語りからなる部分については若干疑問を覚える。祖母の語っていたことを孫がここまで克明に再現できるものか、と素朴に考えてしまう。ここはやはり、たどたどしい聞き書き、あるいは徐慶子の教材ノートに再現できたかぎりのこととして記述されるべきではないか。ともあれ、丸い石Ⅱ墓という想定は私にとってたいせつなヒントとなる。

『mon』第17号も、力作が掲載されていて二〇〇頁を越えている。この雑誌では、近未来小説やファンタジー仕立ての作品が多く掲載されていて、私などにとっては若手の作品の動向を知る手がかりともなっている。

した好短篇。
小松恵理は会社で、身勝手な若い女性社員
の振る舞いに手こずっている。そのことを愚痴
つてしまふ。恵理と賢治の関係もずっと冷えき
っていたのだ。その後、ひとりワインを飲
んだ夜、夢のなかのような状態で、恵理はタ
ロット占い師の老婆のもとを訪れ、「愛のク
スリ」と称するものを飲まされる。
それ以降、恵理は言葉を発しようとする
と激痛に襲われるようになる。会社の仕事もま
まならない。けれども、筆談でコミュニケーション
しようとする。職場の若い女子社員
たちがじつは濃やかな気遣いを示していた
ことに気づく。言葉を発せない恵理は、耳の
聞こえない男性と親しく接するようになる…。
『mon』には私にとって作者の意図が
見えにくい作品もあるなかで、この作品のよ
くまとまった結構に惹かれるところもあつた。
同誌掲載の、飯田未和「姥捨」は近未来小
説の形で現在の焦眉の問題と取り組んでい
る。「高齢者保護法」と並んで「家族関係再構
築法」の制定されている日本では、少子高齢
化が進むなかで、老人の切り捨てが国策とし
て展開されている。七十歳以上の高齢者には
選挙権・被選挙権も与えられないうへ、独居
生活は認められず、パートナーが亡くなった

場合には一年内に〈山〉へ行くか、子どもと
同居するかを選択しなければならぬ。しか
も、子どもと同居した場合にも高齢者は「社
会貢献」をつうじて必要なポイントを満たさ
ねばならず、それが達成されない同居の子
どもには現金納付が課せられるのである。
そんな日本で、十年前に夫と死別した「私」
は息子夫婦と暮らしながら、地域で野菜を売
る「マルシエ」のボランティア、シングル家
庭での子どもの世話、保育園での仕事など、
「社会貢献」に努めている。息子の妻は「私」
が〈山〉へ行くことを願っているようだ。そ
んなとき、保育園で子どもに怪我をさせた
という一方的な嫌疑をかけられ、「私」は貴重な
ポイントの源泉を失ってしまう。最後、「私」
は自らの意志で〈山〉に入ることを選び、そ
こで、「マルシエ」のボランティアで一緒だつ
た、一年前に妻を亡くしていた柴田という男
性と再会する…。

周到な設定で、細部も丁寧に書き込まれて
いる。しかし、最後の場面はむしろ新たな物
語のスタート地点という気もする。このまま
では、社会から遺棄された高齢者たちの集う
〈山〉のほうがよく気持ちよく暮らせそう
だ。しかし、そのこと自体を「社会」は許さ
ず、なんらかの介入を果たしてくるだろう。
高齢者を「遺棄」するだけでなく、「包摂」し
ようとしてくるだろう。〈山〉と「社会」はそ

う簡単に切断されないに違いないのだ。

「こみゆにてい」第110号にも力作、好短篇が並んでいるが、ここでは沢口みつを「蛇の祀り」を紹介しておきたい。

妻を三年前に亡くした拓司はひとり暮らしで、いささか鬱気味である。地域の民生委員にも勧められて、ある日、家の周りを歩いてみる。すると、川べりの草むらで一匹の青大将と遭遇する。その目が夢で見る亡妻の恨めし気な目と重なる。妻の死に対する自責の念が拓司にはあるのだ。

首に痛みを覚えた拓司は近くの整骨院を訪れ、そこで不思議な蛇の骨格標本を目にする。さらに部屋には三体の蛇の写真が飾られている。その院長は二年前に妻と二人の子どもを交通事故で亡くしていて、そのあと家の庭に住み着いた親子三体の蛇を亡くなった家族に見立てて、親蛇が亡くなったときにはそれを骨格標本にしたのだという。さらに、満月の夜に近くの弁財天に近隣の蛇が集まっている、という不思議な民話のような話を聞かされる。満月の夜、拓司はその弁財天に赴いてみる。すると、川べりで見かけたあの蛇もくわわわつて言葉交わす。重篤な病気に陥っていた妻に人工呼吸器をつけるのを拓司は医師に対して拒んだ。正しい選択だったかどうか。そのことが、拓司が抱えている妻への深い負い

目となっていたのだ。妻は納得しなかったが、理解はしてくれた、と拓司は思う…。

冒頭、拓司が家の周りを歩いてつぎつぎと新たな小さな発見をするところ、満月の夜、弁財天で蛇たちが集うところがとりわけ秀逸。

『てくる』第28号掲載の、塩崎勝彦「時空(とき)の広場」もよくまとまった好短篇。

五年前に六十歳で会社を定年退職した神崎は、妻を三年前に亡くしてひとり暮らし。その日、神崎は久しぶりに、自宅から数時間をかけて、備前焼の産地、伊部(いんべ)まで出かける。以前に妻と百貨店の陶芸展を訪れ高価な備前焼の茶碗を衝動買いしたのだが、その茶碗を過って妻が割ってしまった。定年を迎えれば買いなおそうと妻は言ってくれたのだが、それっきりとなっていたのだ。備前焼の産地が伊部であることも妻から教えられていたことである。

その備前焼の里で神崎は思わぬことに、自分が勤めていた会社の元同僚、北川千鶴子と出会う。神崎は独身時代に彼女とすこしつきあいがあったのだが、親の決めた結婚によって彼女は退職したのだった。その後の生活によって彼女は神崎に語る。彼女の夫は備前焼の有望な若手だったが、夫の手まねで焼き物を造るうちに、彼女のほうが評価されるようになった。彼女自身はすぐに備前焼から身を引いたが、やがて夫は酒びたりの日々を送り、自暴

自棄の果てに死んでしまった…。

それにしても神崎の年齢は、さきに記したとおり、設定では六十五歳。作中では十歳は老けている印象だが、つぎの人生のステツプが十分に考えられる。

この作品の千鶴子は備前焼の職人となる道を女性として自ら断念したことになるが、「北斗」第67号掲載の、星川ルリ「画壇」は、女性と画壇の問題、端的にいうと画壇のセクハラ、パワハラ体質を真正面から描いている。不動産業をしている夫の手伝いをしていた

朝岡夏美は、アトリエ用の古民家を探していた若い画家、稲川と知り合いになり、稲川のアトリエで絵を描くようになる。才能を見込まれて、彼女は画壇を代表する「旭日会」に出品することを勧められ、いきなり入選、さらに三年後には「秀作賞」を授与され、旭日会の「会員」となる。そこには旭日会の理事で審査委員長、大内省吾によるあからさまなセクハラが絡んでいた。稲川の誘いで朝岡は前年の地区忘年会に出席し、主賓として招かれていた大内と一夜をともにする羽目になっていたのである。しかも、忘年会の席で、来年の文部大臣賞は稲川に「確保」してある、などと大内は語っていた。

すべては稲川と大内の仕組んでいたことのようにだが、朝岡はこんなことまでして会員になる意味があるのかという思いと、「行ける

ところまで行ってみるのも、面白いかもしれない」という気持ちのあいだで揺らぐ。実際、彼女には大内、稲川とは無関係のところ、個展の話が舞い込んできたりする。しかし、つぎの地区忘年会で、朝岡は大内の隣に稲川の画塾の新鋭が座っているのを目にする…。

作品の時代設定は一九八〇年代ではないかと思われるが、「画壇」にかぎらず、男性中心のさまざまな世界でここに描かれているようなセクハラ、パワハラがいまもまかり通っていることは、日々のニュースが伝えるとおりである。文壇ではどうか、詩壇ではどうか。

『仙台文学』第97号掲載の、近江静雄「風」は八十歳近くになった主人公、進藤智也が「不吉な夢」を見たことをきっかけに、自らの幼少期、一族の歴史などを振り返る作品。

進藤は自分が乗っている「台状の足場」が崩れてゆく夢を見る。夢のなかでその足場に乘るよう促したのは、しばらく前に急逝した大学時代の友人、高平だった。進藤はその夢を自分の生命の危機への暗示と受け取る。作品はそこから、いささか複雑な進藤の一族のルーツの確認という方向を取り、さらに小学校時代の同級生、楠本信子の思い出が焦点化されてゆく…。

作品の流れはとりとめもないようでいて、冒頭の足場の崩れる夢が通奏低音として響いている。気になりながら曖昧に留めていたこ

とを、進藤は自らの足場の確認としてひとつひとつ確かめてゆくのである。これもまたコロナ禍のもたらした内省の産物ではないか。

『青磁』第42号掲載の、松江農「IQ40」は、男性の育児休暇をテーマとしている。タイトルは「四十歳の育児」の意味。

共働きの夫婦の「おれ」は、妻が出産後に二年間の育児休暇を取ったのを受けて、三年目に一年間の育児を取る。その間に「おれ」が息子の基（もと）と向き合った日々の育児レポートといった体裁の作品だが、考えさせられることが多い。二歳になっても息子の離乳が達成されず、たえず「おっぴー」「おっばい」が求められ、ミルクでは代用できないこと。料理に挑戦しても妻までもふくめて機嫌よく食べてもらえないとストレスが溜まること。総じて、保育園に入れるという選択肢を捨てて自分が育児を選んだことの意味が分からなくなること…。

作品としては、妻からの視点が弱い気がする。妻の育児休暇時期、三人の関係はどうだったのか、二年間育児休暇を取って職場に復帰したなら、それなりのストレスも妻にはあったことだろう。くわえて、作品の末尾には育児休暇に入る直前の、いささか張り切った「おれ」の姿が描かれた断章が置かれているが、この構成はどうなのだろう。作者はいわゆるピフオー／アフターの落差を強調したか

ったのか。むしろこの構成には、作品のなかには盛り込めなかつたポジティブな側面が暗示されているようにも私には感じられた。

こういう同人誌評を続けている楽しみのひとつに、新人の登場にひよっとすると立ち会えるかもしれない、ということがある。『V I K I N G』第841号掲載「沈黙の壁」の作者、飾磨准は十九歳ということである。

作品は、優一と岬という男女の大学生をめぐる一種のメタ小説となっていて、岬の父親をくわえて、三者の視点から綴られている。岬が優一に小説を書くことを勧め、岬をモデルにした小説で優一は賞を得る。岬の父親は

作品を読んで、岬の肉体が克明に描かれていることに激怒し、岬に執拗な暴力をくわえるようになる。末尾で岬は自死するにいたる…。岬が自死にはいる経緯を、説得力をもって描ききるためには、やはり作品内にもっと時間が必要だろう。しかし、構成といい、文体といい、大いに期待できる。意欲的で筆力旺盛な新人が同人誌として最長期間を誇る『V I K I N G』に登場したことを祝したい。

一方、書くことからはつきりと離れることを告知する作者にも接した。今回届いている『黄色い潜水艦』第73号に掲載の、天野律子「夢の残り・土竜と虹」の末尾には、作者がこの作品をもって執筆を終わることが記されている。残念だ。